

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

出会い・本・人

歴史好きが牧師になった 小橋孝一

エッセイ

平出慶一自伝 主のあわれみ限りなく
臼田尚樹

本・批評と紹介

R.テイラー 著／竹内一也 訳
「教会」の読み方 加藤博道

田村光三 著
ひかりをかかげて 岩村 昇 篠浦千史

礼拝アイディア集プロジェクト 編
みんなで礼拝アイディア集 古谷正仁

K.ハーモン 著／竹内謙太郎 監修／菊池泰子、榊原芙美子 訳
人は何を祝い、なぜ歌うのか 越川弘英

窪寺俊之 編著
スピリチュアルケアの実現に向けて
長山忠雄

ジョン・キーブル 著／今橋朗 編訳
光射す途へと 加藤博道

松居 友 著
昔話の死と誕生 川中子義勝

日本キリスト教詩人会 編
詩華集 聖書の女性たち 船本弘毅

立教大学教会音楽研究所 編
日本聖公会聖歌集による
聖歌伴奏・アレンジ集1 宮崎 光

近刊情報

書店案内

1 JANUARY
2014



詩篇の思想と信仰Ⅳ

月本昭男 著

第76篇から第100篇まで

好評発売

詳細な語釈、各篇の構造と成り立ちの分析、そして思想と信仰についての深い洞察。周辺世界の宗教思想に目配りしつつ、ヤハウェ信仰の詩に迫る。現在望みうる最高の著者による最高の注解。

◆四六判・定価3360円

旧約聖書入門 1

大野恵正 著

現代に語りかける原初の物語

聖書を平易に、かつ格調高く語ることに定評ある著者が、旧約の豊かなメッセージの核心を現代人に取り次ぐ。今後、旧約入門の定番となるシリーズ。全5巻予定。

◆小B6判・定価1890円

イエスとは誰か

ジョン・ドミニク・クロツサン 著／飯郷友康訳

史的イエスに関する疑問に答える

史的イエス研究に一石を投じ続けてきた著者が、インタビュー形式に託して自らのイエス観を縦横に語った目からウロコの快著。

◆四六判・定価1995円

渡辺禎雄 版画カレンダー発売中

テーマは「ノアのはこぶね」。鮮やかな黄色の地が珍しい、1968年の大作。気軽な贈り物にも最適。定価525円



最も大切なもの

樋口進著

若人たちへのチャペル・メッセージ集

著者は旧約聖書学者であると同時にキャンパス・ミニストリーに心を燃やす伝道者。関西学院大学・大学院で毎日、毎週行われるチャペルで、心を込めて語ったメッセーじから33編を精選。

◆小B6判・定価1680円

ものからたのよるなせい

クドウあや 作／玉井邦夫 解説

◆A4変型・38頁 定価1365円



「出生前診断」の問題をとりあげ、両親の苦悩と出産の決断、共に生きる喜びを描いて、いのちの尊厳を考えます。

せいやくんは、ダウン症という病気を持った子どもです。クリスマスの夜に生まれたせいやくんは、まもなく特別支援学校の1年生。学校ではどんなすてきなことが待っているでしょうね!



出会い・本・人

歴史好きが牧師になった——小橋孝一

なぜか分からないのだが、私はこどもの頃から「歴史」（特に日本史）が好きである。気がついたら「歴史にまつわる本」を読み漁っている自分がいた。「出会い」というより「歴史」が勝手に私の中に「入り込んでいた」のだ。

自覚的に「出会った」のは「聖書」である。教団の開拓伝道で私の町に教会ができて、高校二年の秋に友人たちと通い始め、クリスマスに受洗した。そこで分かったことは、真実は「歴史を学ぶ」ことによってではなく、「聖書から神の言葉を聴く」ことによって得られるということだった。

そこで当然のように考えていた日本史研究の道を捨て、牧師の道を志して同志社大学神学部に入學。しかし大学院での専攻はやはり「歴史神学」だった。「好き」はそこまで私の中に根を張っていたのだ。その後の五十年余りの伝道生活の間もこの「好き」は全く変わっていない。

街を歩いて書店（「本屋」と言いたい）を見ると、真っ直ぐに「歴史」コーナーに向かい、気に入った本を手に入れてホクホクしながら帰ってくる。その幸せな気分はたとえようがない。

読み終われば書棚の開いた所に突っ込んでおく。ある時必要に駆られて「歴史関係の本」と「聖書関係の本」に分類してみたら、ほぼ半々だったのには我ながら驚いた。それも「キリスト教史」は聖書の方に分類しての話である。

だがこの歳になって、ただ「歴史を息抜きとして楽しんでいく」だけでは気が済まなくなってしまう。この日本の歴史を動かして来た力は何か。日本の歴史の「心の深層」を流れてきたものは何か。それを知るために、今までのような気分しだいの乱読ではなく、「日本の宗教史」に焦点を当てて読むようになった。

だが勿論、それだけで真実が分かるわけではない。「聖書から聴く神の言葉」から「日本史」を見通さなくてはならない。聖書の光で照らせば、日本社会の真相が明らかにされる。日本伝道の「的」がはつきりし、それを射抜く「力」も得られることだろう。今、私が横浜に住みながら船で通っている伊豆諸島の新島は、日本社会の心の深層が露わになっている所である。伝道の的をはつきりさせねばならないの思いや切である。

（こはし・こういち＝NCC議長、日本基督教団新島教会牧師）

平出慶一自伝 主のあわれみ限りなく

本書は一九八二年に初版発行された第三版であるが、平出慶一師の生きた証しが記され、また当時のキリスト教界を知る歴史的文献としても貴重な一冊である。明治から昭和期にかけての信仰による歩みは、現代に多くの恵みを語りかけている。

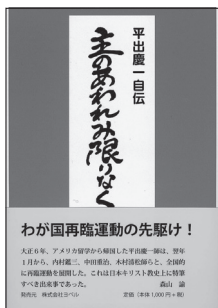
慶一師は少年期に両親と姉、二人の兄を相次いで失い、絶望のうちに二〇歳で聖書に出会う。聖書を探し求めて歩む姿からは、燃える熱い求道心が迫ってくる。その前に福音を知った時の喜びは感動的である。本書には「福音史」（ウイリアム・インブリー著、井深梶之助訳）を姉と一緒に読んだ時の様子や次のように記されている。「慶一師は声を出して読み始めた。その日は遅くまで読み続けた。夜が更けて床に就いたが眠れそうもない。また起きて読み続ける。翌日も同じように読み続けた。次の朝、起きて雨戸を開けると、眼前には新しい世界が朝日に輝いていた。万物が改まったように見えた。慶一師も姉も、今まで味わったこともない喜びが腹の底から湧き上がってくるのを感じた。その喜びを誰かに分かち与えないではいられない。



平出慶一氏

の問題が扱われていなかった。そのことがいつも私の心にかかっていた。私は甥に、『内村先生のために祈ろう』と言って二人でコロンバスの郊外の林の中に入り、内村先生のために切に祈った」（八八頁）。「甥・平出銀一郎、コロンバス・オハイオ州」

帰国した翌年、一九一八年（大正七年）より、内村鑑三、中田重治、木村清松らと共に「再臨運動」を全国的に展開したのである。さらに、アメリカで親交の深かったA・B・シンプソンからの要請を受けて広島アイアンズ神学校の校長に就任し、その後、日本一致神学校を創立、国際基督教大学の創設にも参画し、日本の福音宣教と神学教育に専心する。その後、慶一師は六五歳の時に成城キリスト教会を創立した。当教会は昭和二年（一九四七年）二月二日に慶一師によって成城学園女学校の講堂で最初の礼拝がさげられ、一九五二年九月には日本福音基督教団に拡充し、一九五五年三月には調布市に保惠学園を



臼田尚樹

見ると庭には鶏が二、三羽、餌をついばんでいる。慶一師はその鶏に話しかけた。『君たちは知っているか、神様のことを。イエス・キリストさまのことを……。』（一一―一二頁）

その後、二一歳で伊藤藤吉師（ダッチ・リフォームド・ミッシオン）から洗礼を受け、翌年、東京神田神保町の聖書学院に学び、ホーリネス教会監督の中田重治師の指導を受けた。二年後に卒業し、ヘフジバ・ミッシオンの銚子教会の牧師として四年間、伝道牧会に従事。その後、シアトル日本人バプテスト教会にて奉仕し、インディアナ州テラー大学、ニュージャージー州ドルー神学校、さらにボストン大学大学院で学び、その八年間、米国各地の教会や修養会などで奉仕し、「ジャパニーズ・ビリー・サンデー」と米国では呼ばれていた。

帰国直前に次のような祈りが本書に記されている。「内村鑑三先生は、私（平出慶一）が初めて会ったキリスト教界の先生であり、以来私の心から離れたことはなかった。しかし、どういふわけか内村先生の『聖書の研究』の中にはキリストの再臨

はじめ、保惠キリスト教会を創立した。一九五一年五月には日本福音連盟が結成され、慶一師は初代理事長となり、オランダでの世界福音連盟の大会で、同連盟の極東地区選出理事に就任し、世界福音連盟の第一回世界大会（スイス・クラレンス）に出席している。その後、海外の伝道旅行にも三回にわたって専心した。そして日本福音連盟の働きは日本プロテスタント聖書信仰同盟と日本福音宣教師団と共に日本福音同盟設立へと繋がっていった。一九五二年三月に旧会堂が献堂され、その後、再臨待望同志会を結成し『ヨハネ黙示録略解』を著す。現在の会堂は一九八三年に献堂され、慶一師は生涯を通して「罪の悔い改め、聖霊による聖め、再臨待望」を説き続けた。多くの働きを通して、そのメッセージは力強く、聖書の説き明かしは深く、耳を傾ける一人一人の心を揺さぶったのである。生涯の祈りは「マラナ・タ」（主よ、来たりませ）であり、その祈りに導かれて、慶一師はおよそ八九歳まで主の奉仕を続けた。初代教会より受け継がれた「マラナ・タ」の祈りが再び心に刻まれる一書である。

（うすだ・なおき）日本福音基督教団成城キリスト教会牧師

（B6判・一八八頁・定価一〇五〇円〔税込〕・ヨベル）

シンボルから見るキリスト教入門
R・ティラー 著
竹内一也 訳

「教会」の読み方

画像や象徴は何を意味しているのか



加藤博道

『教会』の読み方』というタイトルにまず心をひかれる。「読む」とはどういうことであろうか。そこに示されている意味が理解できるといふことであろうが、その「理解」にもずいぶん幅と深みがあるように思う。そこに書かれている文字や描かれている絵、図柄がその背景に持っている得体の知れないほどの奥行き、その背景にある史実、伝説を交えた物語、そしてそれを語り伝えてきた長い歴史の中での人々の信仰、いやほとんど情念と言えようものに一瞬で触れる体験、そしてそれが観ている自分の中に飛びこんでくるような出来事。改めて味わい納得したり、新しい興味が湧いてくる。著者は教会の中の画像（ステンドグラス等）が「文字の読めない人々のための物語本」、教育的な手段であったという度々言われてきた考え方に同意しない（二一頁以下）。その「画像が表している物語を前もって知らなくても理解され得るような画像は」全くない、それらの物語は文字で読まれる以上に語られてきたものであり、「文字の読める人々も読めない人々も等しく原点に馴れ親しんでいた」のだと言う。それらが画像で表された時に起こる「共

有の感覚」——感動や共感や興味——こそ重要なのである。まず序言では象徴の意味と力について述べられる。象徴は言葉数の多い文字表現が持つていないような力で、わたしたちの目と心をひきつける。「AΩ（アルファとオメガ）」など（二三頁）、「わたしはアルファでありオメガである。最初の者にして、最後の者、始めであり、終わりである」というキリストの究極的な意味を示す言葉が、瞬間的に感覚的に捉えられる。このギリシャ文字は「しばしばステンドグラスで上の高いところに」、東方教会のイコンの「イエスの光背の中に、十字架の横棒の上に」見られ（二三四頁）。またキリストが死に打ち勝ったことを表す復活の太いろうそくに記される（四一頁）。

「なぜ教会を読むのか」「画像の中のキリスト教神学」「聖餐」「教会史の二つの点」「源泉」「数とカタチ」「色」「光背」について述べた序言のあと、「教会 建物と調度」「十字（架）とクルシフィクス」「神」「イエス」「おとめマリア」「聖人」「旧約聖書」「博士、天使、抽象的事物」「動物、鳥、魚」「植物」「文字と言葉」とそれぞれ多くの画像、象徴、その背景や意味の紹

介があり、最後は教会の聖職者の服装のことが語られる。これはかなり英国教会（聖公会）の伝統に添ったものと言える。

「源泉」の個所で説明されているが、教会の多くの画像、象徴の源泉は、もちろん聖書が第一であるが、しかしそれだけではなく「外典的なテキスト」例えば「ヤコブ原福音書」「ニコデモ福音書」等があり、また数世紀にわたり語られ伝えられてきた聖人伝や殉教伝、伝承あるいは伝説といふべきものも多く含まれている。「神の小羊」（アグヌス（アニムス）・デイ）や「魚」（イクテウス・idung）がそのスペルから「イエス・キリスト・テウ・ヒュイオス・ソーテル（イエス・キリスト、神の子、救い主）」と重ねられ、実は十字架以上に初期のキリスト者たちが採用した教会の秘密の象徴であったこと等はまだしも（六一頁、一九七頁）、ユニコーンの象徴性等は日本人にはあまり馴染みのない、しかしローマ神話においてはよく知られた存在である。キリスト教のシンボルは、キリスト

教以外の様々な伝承からもとられているし、多くの殉教伝等は錯綜した伝説といふべき部分も多く含んでいる。しかしそれらも含めて、キリスト教という宗教の単なる論理一貫性だけではない、それを担ってきた人々の多様な信仰の在り方が見えてくるようである。訳者の言われる「旅行の手引き」、キリスト教美術への入門と同時に、本書は具体的な画像、象徴の個別の説明だけでなく、キリスト教信仰の基礎、概要についてかなり多くを述べており、全体を読み通す中で、二千年の歴史を生きてきたキリスト教への、ユニークな入門書ともなるのではないだろうか。

（かとう・ひろみち＝日本聖公会東北教区主教）
（A5判・二六〇頁・定価二二〇五円（税込）・教文館）

神学ダイジェスト113号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にあつて、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2012年 12月発行
A5判128頁
定価610円・送料80円

特集 二十世紀の神学者（前）
第二バチカン公会議を支えた神学者たち
教会の三位一体的基盤
神の母性と聖霊の女性性について
すべての信者の教導権
信仰、希望、愛
霊性の規範としての福音
「わたしの記念として……」
ヨブの四つの顔
護教論と神学
カトリック学校教育の宗教的次元（四）
M D シュニエ
Y コンガール
E スキレバークス
K ラーナー
H U フォン・バルタザール
X レオン・デュフォー
J タニエル
H ド・リュバック
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見
百瀬文見

上智大学神学系
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

ネパールの豊かさを伝えようとした博士の思い

田村光三著

ひかりをかかげて

岩村昇

ネパールの人々と共に歩んだ医師



篠浦千史

二〇〇五年十一月二十七日の朝、岩村史子さんから電話がかかってきました。日曜日の朝でしたので、余程のことではなければかららない電話です。「岩村が先ほど天に帰りました」と史子さんの涙声が聞こえてきました。昇博士が入院していることさえ知らされていませんでしたので、その言葉の意味するところを理解するのに少し時間がかかりました。わずか数日の入院だったと、後からお聞きしました。今日からアドベントという日の朝、昇博士は天国へ旅立たれたのです。アドベント、それはイエス様がお生まれになるのを待つ期節なのに、せっかく昇博士は待ちきれずに自分からイエス様に会いに行ってしまったように思えました。

岩村昇博士が原爆症のために志半ばにしてネパールから帰国された直後、私は神学校で初めて昇博士の講演を聴きました。「この人が古切手運動のきつかけを作った人だ」とその時知りました。郷里が同じ愛媛県だということに親しみを覚えました。まさか自分が昇博士のお働きを支えるボランティア活動に参加することになるとはその時は思いもしませんでした。

伝道者として故郷愛媛に帰り、縁あって、教会や同窓会、医師会やロータリークラブなど、沢山の方々で故郷愛媛で昇博士の志を継ぐ若者たちを育てようと思い、それを支える活動に参加することになりました。シエラ（分ち合い）キャンプと称するボランティアに、毎年愛媛から数名の青年をネパールへ送りしました。キャンプたちは、岩村夫妻のネパール人養女が活動しているネパール、チトワン県にある農場をベースキャンプにして村人と一緒に働きました。木を植え、トイレを作り、村づくりのお手伝いをしました。ネパールから帰ってきたキャンプたちが口にするのは、「何かしてあげたいと思ってネパールへ行ったけれど、気がつけばネパールの人たちに助けられてばかりだった」ということ。してあげるつもりが、してもらい自分だったということ。それくらい目に見えない豊かさがネパールにはあります。それこそが昇博士が私たちに伝えたいと願ったネパールの姿そのものなのだと思います。

今回出版された『ひかりをかかげて 岩村昇』はそういった昇博士の思いが素直に伝わってくる本です。その思いがどこか

生まれ、どのように育まれたか、伝わってきます。岩村昇という人は愛媛で生まれ、広島で被爆し、鳥取で史子さんと出会い、それ以来史子さんと二人三脚で歩んでこられました。彼の口癖は、「欧米では奥さんのことを『ベターハーフ』と呼ぶけれど、私にとって史子は半分ではなく、90%ですよ」というものでした。ネパールへ行くという決断を下した時も、いろいろなことを考慮しながら迷う博士に「取り残された人の所へ行きましょう」と「トリトリの誓い」を思い出させ、背中を押したのは史子さんでした。祈って実行するよう促したのです。そして彼女もまた博士とともにネパールへと赴きました。史子さんが自分を支えていくること、自分と神様とを固く繋いでいくことを昇博士はよくご存知でした。

文面からも昇博士のバイタリテイが溢れてきますが、それを常に祈りつつ支えてこられた史子さんの思いも伝わってきます。突っ走りすぎて、転ぶまで走ってしまう子どものように無邪気に

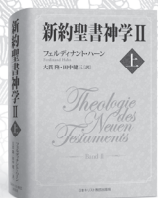
な昇博士に、時にはブレイキをかけつつ、一緒に祈りながら、お二人はネパールで学んだこと、培ったことを日本に帰ってからも多くの方々と分かち合おうとしてこられました。昇博士が天に帰ってから、もうすぐ九度目のアドベントが来ます。それを前にして、この本が世に出たことに大きな喜びを覚えます。そして、昇博士の思いは今も私たち皆の心に生き続けていいるんだなあと改めて思います。この本を手にした人が昇博士の願った「宇宙地球号の乗組員」としての自覚を持ち、いろんな国の人、いろんな立場の人と、互いに分かち合い、支え合う心を育んでくれることを願ってやみません。そこには良きサマリア人の譬え話をされたイエス様の思いが溢れているからです。是非読んで頂きたい一冊です。

（A5判・一四頁・定価二二六〇円〔税込〕・日本キリスト教団出版局）
（しのうら・ちふみⅡ日本基督教団さや教会牧師）

新約聖書神学Ⅱ

上

フェルディナント・ハーン 大貫隆・田中健三「訳」



ドイツを代表する新約学者の集大成、待望の第Ⅱ巻。新約聖書の神学的主題を俯瞰し、新約聖書全体がどのように語っているのかを詳細に解説。

A5判・642頁・12600円

本書を心から推薦します

青野太潮

西南学院大学神学部名誉教授
日本新約学会会長



聖書

福万広信

関西学院初等部宗教主事



旧約と新約の要点を学べる易しいテキスト。マメ知識や図版、地図を多く収録した楽しい一冊。

A5判・96頁・840円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp〔価格税込〕

<http://bp-uccj.jp>

「礼拝パーツ」の用途豊かな宝箱
礼拝アイディア集プロジェクト編

みんなで礼拝アイディア集 「こどもさんびか改訂版」を用いて

昔、ある先輩老牧師が、私にこんなことを話してくれた。

「明治以降、日本の教会に人が溢れたのは、みんな教会の付加価値を求めてのことだった。英語を習うことができる、男女交際をすることができる等々、みんな付加価値だ。教会学校だって、優しいお兄さん、お姉さんがいて、相手をしてくれたり遊んでくれたりした。それも付加価値だろう。しかし、それを目をつけた人々が、英会話学校や、スイミング・スクールやいろいろなものをつくった。専門家が本気で取り組んだら、教会の付加価値などすぐ色あせた。今教会に残ったものは『礼拝』だけ。だから今、本気で教会が礼拝を『売り物』にできないなら、死活問題になるよ」。

この先輩牧師のご高説に、皆様はさまざまご意見をお持ちだろう。しかし、「今、本気で教会が礼拝を『売り物』にできないなら……」という件は、その言葉を聞いてから二十年以上経過するというのに、今尚私の中で響き続けている。それは、私にとって、教会を巡る本質的な問いだったからである。

このたび、『みんなで礼拝アイディア集』が出版された。こ



古谷正仁

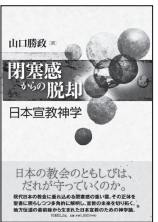
これは、『こどもさんびか改訂版』が刊行十周年を迎える中で、この賛美歌集が持っている可能性の豊かさを少しでも多くの人々に伝えるために出版されたものだという。また本書を監修した四人の牧師（飯塚拓也、古賀博、真壁巖、吉岡光人）は、現在の季刊『教師の友』の常連執筆者あるいは編集委員として、この教案誌の内容を豊かにするために奮闘している人々であり、礼拝を豊かにするために、その現場で「命を削っている」人々である。

彼らが「発行によせて」において語っているのは、①礼拝を豊かにするために、事例を豊かに紹介した。②さまざまな「礼拝パーツ」（例えばリタニー）を用いやすくするために、目安として礼拝順序も紹介した。③『こどもさんびか改訂版』はおとなの礼拝にも用いることができる、「礼拝を新しくするための要素が満載の宝箱」である。④本書のある部分をそれぞれの礼拝に「ちよい足し」するだけでも、礼拝は本当に豊かになる。⑤そして教会のみんなで礼拝について考えよう。ということである。

ページを開こう。第一部は「教会の一年 教会暦と行事のためのアイディア」である。そこにある目的は「教会暦や行事をテーマとして、礼拝全体を特別礼拝にするものから、リタニーや奏楽曲などの部分的な提案までを紹介する」ということで、本当に多種多様な提案がなされていて実に楽しい。その中でも特にリタニーが美しく豊富だ。もう少し言葉を練って欲しいと感じるものもあるが、吟味され、使いやすいように配慮されたものが多い。

そして第二部は「礼拝の流れにそって 解説とアイディア」である。ここでは「礼拝を構成する一つひとつのもの（例えば招詞、賛美歌、主の祈り、献金等）の意味や位置づけを理解するため、基礎知識をコンパクトにまとめた」のだという。その「基礎知識」は簡潔ながら堅実な内容であり、新しいCSリーダーへの説明や、リーダー会で学びを深めるといったことに用いることができるだろう。それだけではなく、「トーンチ

山口勝政 著 日本宣教神学 閉塞感からの脱却



宇田進師評・聖書が告げるキリストの福音は、……現実には置かれている時間・空間の直中に生きる人々に届けられるものである現実を、今一度、ともに心に銘記したい……本書は、まさにこの共通課題に関する注目すべきガイドブックと言える。*在庫僅少！*AS判一、八九〇円税込

※最新刊※

宮村武夫著作 ⑥ 主よ、汝の十字架をわれ恥ずまじ ドストエフスキーの神学的考察

『悪霊』における人神論と神人論
大和昌平師：人神論と神人論の死闘に焦点をあて、ドストエフスキーの『悪霊』が神学的に考察されている。宮村先生の神学校での講義に似て、テーマが次第に掘り下げられてゆく構成。
●四六判・292頁・1,890円（税込）



株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
自費出版の専門出版社

ヤイムを使って「子どもたちの信仰告白」「33番『サントサントサント』を用いた連祷」といったアイディアや、礼拝に関して、大切なことを思い起こさせるコラムがちりばめられ、豊富な提案に取り組み意欲を起ささせるさまざまな工夫がある。そして装丁・デザインを担当された石橋えり子氏の努力によって、肩肘張らずに気楽な思いで、豊かな内容に触れることができるように配慮されている。本書もまさに宝箱である。

もちろん、パーフェクトな内容を持つ本など我々人間にはつくりにくく、不足は当然のだから、説明不足や物足りなさを感じる部分もある。しかしそれは、リーダー会の意欲と準備によって、自分たちでアレンジすることが可能な範囲だ。それぞれのCS等で本書を手に取り、「宝箱」の豊かさに触れ、礼拝を真に礼拝たらしめる歩みに、共に踏み出していただきたいと願う。（ふるや・まさよし）日本基督教団神田教会牧師、日本聖書神学校教授（B5判・八八頁・定価一六八〇円（税込）・日本キリスト教団出版局）

典礼によるパスカル・ミステリー(過越の秘儀の現臨化

K・ハーモン 著

竹内謙太郎監修／菊池泰子、榎原美英子訳

人は何を祝い、なぜ歌うのか

典礼音楽の神学的考察



越川弘英

本書はサブタイトルにもあるように「典礼音楽とは何か、それは何を指し、どのような働きを担うのか」を神学的哲学的に考察した専門性の高い研究書である。著者は米国在住の典礼音楽を専門とする研究者・教育者であると共に、歌手でありオルガン奏楽者であり聖歌隊の指導者でもあるという。

著者は本書の冒頭で、「教会が、典礼を歌わずにおられないのはいったい何故だろうか」(二頁)と問い、「典礼行為」の本質、それを遂行する様態としての音楽の本質、そしてその両者の関係がそこに関わる人々にとって意味するものは何かを問う。そして「結論」では、「私が望むのは、共同の歌はパスカル・ミステリーの儀式的現臨化を促進し、またそこに参与するゆえに、典礼にとって必要不可欠なものであるという神学的洞察が、典礼音楽に関わっている人たちに、それぞれの司牧的な立場における神学的基礎を提供することである」(一六九―一七〇頁)と述べている。

この問いから結論に至るまでの四章から成る本文の概要を記しておく。

「第一章 パスカル・ミステリーとは何か」

この章では典礼がキリスト教信仰の本質であるパスカル・ミステリーを儀式的に現臨せしめる行為であることを解説する。パスカル・ミステリーとは通常、「過越の秘儀」もしくは「復活の秘儀」を意味するが、著者はそれらを踏まえつつ、この言葉を「キリストによって『既に』完成された罪の贖いと、私たちの内外で働き続けている『未だ』完成されていない救済との間の弁証法的な緊張」(一八頁)と定義する。典礼はこのような秘儀を現臨化(アナムネシス)する営みであり、著者はポール・リクールの時間と物語性に関する所説を援用しながら典礼における現臨の意味を掘りさげていく。さらにこうした洞察を実際の典礼の構造と展開に適用してみせる。

「第二章 音楽、そして歌という経験」

ここでは典礼音楽を考える予備的考察として、音・音楽とは何かといった原理的な問題から始めて、音楽と空間、音楽と存在、そして音楽と人格といった課題を取り上げて論じている。人間の行動領域を三つに分類し(物理的領域、意識の領域、

霊の領域)、それぞれの領域と音の関連性を考察する。本章の最後にある一文を引用しよう。「歌唱という行為を分かち合う中で、音と声、および人間が作り上げる社会関係において働く力・抵抗のすべてが協働し、刻一刻と変転する世界の一致を創り出すのである。」(九〇頁)

「第三章 典礼歌唱とパスカル・ミステリー」

本章では先のふたつの章における考察を土台として、典礼と音楽との結びつきが本質的なものであることを論じる。典礼歌唱は会衆が典礼においてパスカル・ミステリーに出会い、それを獲得する不可欠の様式であって、人々は典礼歌唱によってキリストの体としての共通のアイデンティティを与えられ、本来のキリスト者としてあるべき存在へと導かれ変容を遂げていくということが力説されている。

「第四章 教会への示唆と課題」

この最後の章では前章で論じられた典礼と歌唱についての洞

察を、実際の共同体における典礼の実践、とりわけキリストの体としての会衆の存在と働きに結びつけて論じている。評者にとって教えられるところの多い章であった。

本書は聖公会やカトリックのような典礼形式を前提として記されている。しかしそれ以外の教会に属する人々にとっても、礼拝と礼拝音楽の関係と意味、またそれが会衆とその現実の生にどのように関わるのかという問題について、原理的本質的な次元においてきわめて重要な示唆を与えてくれる文献である。

本書の最後には「改題」「解題」として、主な用語解説を含む監修者・竹内謙太郎司祭と訳者・菊池泰子氏の対談が掲載されている。本書を理解し、本書の意義を再確認する上で有益な付録となっている。

(こしかわ・ひろひで 同志社大学キリスト教文化センター教員)
(四六判・二〇〇頁・定価「一九四〇円」(税込)・聖公会出版)

聖公会出版

— 近 刊 案 内 —

なぜ教会へ行くの パンとぶどう酒のドラマ

著 ● テイモシ・ニドクリフ 監修 ● 岩城聡／伊達和民
訳 ● 芦屋聖マルコ教会翻訳の会

(四六判・上製 2040円)

カンタベリー大主教がレントブックとして依頼した本。カトリックの修道士である著者は「見えないドラマが、私たちの人間性の核心部分で展開している」と語る。人が、神に感謝や賛美を表す本来の意味を解き明かす。



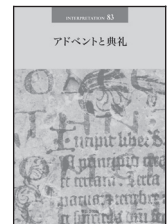
アドベントと典礼

日本版インテリプリティション83号

総合監修 ● 月本昭男・大貫隆・西原康太

(A5判 2100円)

降臨節(待降節)、アドベントの四週間は、クリスマスへの準備期間だけでなく、キリストの再臨と神の王国の到来を待ち望む時でもある。アドベントとは何か。キリスト降誕の祝いまでのこの時期に、絵画、新しい賛美歌、礼拝の歴史など、興味深い視点、切り口で問いかけろ。



〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nsk-bookshop@company.email.ne.jp

スピリチュアルケアの実現に向けて 「第18回日本臨床死生学会」の取り組み

本書は二〇一二年一月に窪寺俊之大会長の下に開催された「第18回日本臨床死生学会」のシンポジウムの記録を編纂したものである。日本臨床死生学会は一九九五年、「臨床の場における死生をめぐる全人的問題をメンタルヘルスの観点から学際的かつ学術的に研究し、その実践と教育を行うことにより、医療の向上に寄与」することを目的として設立された。

一九九八年、アラブ諸国は一致してWHO執行理事会で、健康の定義の physical, mental and social well-being に spiritual を加える改定案を提出した。この改定案は総会で議論されたが、一九九九年総会では審議を見送りにし今日に至っている。これをきっかけとして日本でも、スピリチュアルおよびスピリチュアリティということばがにわかに注目されるようになってきた。しかし、このことばは日本語として説明しにくいことばであり、日本人の多くは馴染みない環境にあるためか、いまだ日本語訳は定まっていない。日本臨床死生学会でも過去に「死生学におけるスピリチュアリティ」が大会テーマとして取り上げられたことがあるが、概念的な取り組みが主体であった。

今回の日本臨床死生学会大会は、日本におけるスピリチュア



長山 忠雄

ルケアの第一人者である窪寺俊之大会長の下に「スピリチュアルケアの実現に向けて——理論・実践・制度」を大会テーマとして開催された。スピリチュアルケアを真正面から取り上げ、臨床の現場においてスピリチュアルケアを具体化することに力点を置いた取り組みがなされた。

シンポジウムⅠ「人間成長を目指すケアの実践」では、武蔵野大学看護学部・高木真理氏が、マーガレット・ニューマンの「拡張する意識としての健康」の理論に基づくパートナリーシップのケアとその実践例を紹介している。さいたま赤十字病院緩和ケア診療科・原敬氏は医療者の立場から、武蔵野大学看護学部・小西達也氏はチャプレンという専門職の立場からスピリチュアルケアの実践への対応を論じている。

シンポジウムⅡ「スピリチュアルケアを制度に載せる」では、三育学院大学・本郷久美子氏は看護の中でのスピリチュアルケアの教育について、東京大学大学院・松島公望氏は米国の宗教コーピング尺度 RCOPE について、人間総合科学大学・三澤久恵氏は尺度開発と尺度を利用したスピリチュアリティ支援の方向性と課題について、神奈川県立保健福祉大学・河幹夫氏は

社会保障と費用——制度と実践について、主に制度の面から論じている。

シンポジウムⅢ「スピリチュアリティの架橋可能性をめぐって」では、薬剤師でチベット医である小川康氏はチベット医学がスピリチュアルケアに貢献できること、菊名記念病院・庭野元孝氏は現在の緩和ケア事情について、慶応義塾大学・正木晃氏は東日本大震災以後における日本のスピリチュアルな世界について、聖学院大学・松本周氏はキリスト教のスピリチュアリティについて論じている。

シンポジウムⅣ「東日本大震災を受けとめて」では、医療法人社団仙石病院・尾形妙子氏は東日本大震災の被災者、遺族として死を見つめて生きた日について、聖路加国際病院・尹玲花氏は阪神淡路大震災から一八年——希望の中に生きるといふこと、聖学院大学・左近豊氏は、哀しみを語り伝える——旧約聖書の嘆きに聴く、との課題で書かれている。

人の死をめぐる問題やスピリチュアリティに関する課題は、科学的・医学的対応のみでは解決できない多くの内容を包含している。本書のいずれの著者もスピリチュアルケアの重要性についての認識は共有しており、その論文の内容はスピリチュアルケアの理論・制度・実践と多岐にわたっている。それぞれの立場によって実践の仕方と対応やその取り組みには多様性があるが、いずれもスピリチュアルケアの実現には欠かせない要素に言及している。また、宗教や日本の風土・文化の特性に根ざした複雑な課題も浮き彫りにされている。

スピリチュアルケアの実現に向けて未解決な課題が山積しているが、本書に書かれている多くの示唆に富んだ内容は、スピリチュアルケアの実現に大きく寄与するものと考えられる。関係者の一読を期待したい。

(ながやま・ただお 日本臨床死生学会前理事長)

(A5判・二九二頁・定価二四二五円〔税込〕・聖学院大学出版会)



テゼ

巡礼者の覚書

黙想と祈りの集い準備会*編

Taizé



霊性の日常的で具体的な景色——

巡礼者の目に映る
景色とは。

「スピリチュアリティ」
連載の人気エッセイ
待望の単行本化

A5 変型判

定価 1,890 円 [本体 1,800 円 + 税] 円
ISBN978-4-86325-059-8



株式会社 一麦出版社

札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888

http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

英国教会の「詩的な神学」を凝縮。黙想の同伴に
ジョン・キープル著
今橋朗編訳

光射す途へと 教会暦による信仰詩集



加藤博道

「少なくともキープルの場合、詩は説教に近く、また、説教とは講義や講演や解説よりも詩に近くある」と、本書の編・訳者、今橋朗氏は「あとがき」で述べられている（一九二頁）が、全体を読んで確かにその思いを強くする。聖公会・英国教会にはキープルの他にも、共に十七世紀を生きた詩人司祭ジョージ・ハーバート、ロンドンの聖パウロ大聖堂の主任司祭であった詩人司祭ジョン・ダン（誰が為に鐘は鳴る」の原詩の作者）がいる。ドイツ神学のような厳密な論理的言語と比較すると、「詩的な神学」とも言うべき伝統が英国にはあり、イメージ、感性、観想が大きな役割を担っていると感じる。

キープルは一七九二年、英国グロースター州に生まれ、十五歳でオックスフォードに入学、一八一一年卒業と同時に同校のフェローとなって「詩学」を教え始めている。一八一六年に司祭となり、後にオックスフォード運動の発火点となる痛烈な説教を行うことになるが、牧会者であることをもっとも愛し、小さな町の教会の牧師として生涯を送った。

十九世紀、時は近代主義、啓蒙主義、合理主義、世俗化へと

突き進む時代の中で、英国教会を愛し、とくにその祈祷書と教会暦に沿った一年の祈り、観想、感性を何よりも大切に、それらが教会の信徒への牧会、力づけ、配慮としての意味を持つようにと願い続けた人物であると思う。教会暦、あるいは「典礼暦年」という言い方もあり、それは「一年の自然の流れの特定の季節に巡って」くるもので「歳時記的に生活習慣としても親しまれることになり」「そのような自然の移り変わりに伴う感覚が、この詩集の特色の一つ」でもあるが、しかしそれらは「単なる自然主義、牧歌的ロマン主義の詩」ではなく、「また一見、不思議な表現は神秘主義ではなく聖書象徴」であると編訳者は言う（八頁）。

この書、原題 *The Christian Year* は一八二七年に発行され、ベストセラーとなる。本書はその抄訳（抜粋）で、原著の一〇九編のうち三十一編の詩を訳出している。「朝の祈り、夕べの祈り」「待降節から降誕節へ」「受難節から昇天日へ」「聖霊降臨日から終末主日へ」「聖餐・洗礼・堅信礼」と教会の暦主な礼拝の時に沿っての珠玉の三十一編である。我々が比較的

身近に知っているキープルの詩の一つは「朝の聖歌（賛美歌）」であらう。

来る朝ごとに覚めては悟る
ここに始まる一日のすべては神の愛、
暗い一夜の眠りを安けく守られ
ここに命と力と想いは更新される、と。

日ごとにささげる朝の祈りは
新たな恵みでわたしを包む。
新たな咎をも赦してくださる新たな憐れみ、
新たな信仰、御国を慕う新たな希望。

（『日本聖公会聖歌集』15番、『讃美歌21』210番）

多くの詩を紹介できないのが残念であるが、一つだけ。

▼雑誌『ミニストリー』の人気連載「新来者が行く」を単行本化！

もつと教会を 行きやすくする本

「新来者」から日本のキリスト教界へ
八木谷涼子●著

はじめて教会に行った「新来者」が教会からどんな印象を受けたか、教会のどんな対応を好ましく思い、あるいはどう思わなかったかをイラスト満載で解説！ 牧師や教会役員におすすめの冊！

■A5判 96頁 1,575円

▼宗教が自然の問題にどう答えるか――

自然の問題と聖典 人間の自然とのよりよい関係を求めて

本書は、関西学院大学キリスト教と文化研究センター●編の『フロンティア』「自然の問題と聖典」での研究発表を編集したものである。人間と自然との関係はどうあるべきであろうか。宗教が「自然の問題」にどう答えるかは重要な課題である。

■四六判 340頁 2,200円

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 048-424-2067（価格に税込）
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

「ことば」を信じて、子どもたちとともに生きるために
松居 友著

昔話の死と誕生



川中子義勝

三十年ほど前に刊行した著者三十代の著書の再刊、しかも三冊同時に再刊されるという。「教文館版のあとがき」に、その意図が述べられている。著者は現在、宗教の違いによる戦乱や環境破壊など現実社会のひずみのただ中で、具体的実践を通して、解決の道をたどっている。本の読み聞かせをしながら子どもたちと共同生活をする、その経験を日本人の人々に分かたために、かつての理論的出発点を再び刊行することのこと。

同時に再刊された『わたしの絵本体験』『昔話とこころの自立』との三部作は、「三位一体」的な働きかけを人間界での受けとめるものとされる。宇宙像、コスモロジーを扱う本著は、その聖霊論に相当することになる。一読して、昔話をよすがとして直感的に掴まれた統一的な世界観を提示する、構成的な書物という印象を受けた。本書のユニークな点は、北海道の地でアイヌのユーカラに取材した昔話を解釈し、古代日本人の宇宙像を説明する点であろう。狩猟採集文化の一元的宇宙像に、農耕牧畜文化への移行に伴い二元論的宇宙像が重なる、それぞれに当てはまる昔話が提示される。射程は日本人の現在を規定す

る科学技術文化の宇宙像にまで及ぶ。人間の経済生活と文化的生は一体で、宗教もその一要素と見る。その述べ方はマルクス主義や文化人類学の史観に通じるとも言えるが、著者なりの世界観の表明が本書の統一を形作る。人類史の過去を包括し、新世紀へと眼差しを向ける直感的な構想力を感じさせる。

昔話についての書物は少なくない。研究書だけを見ても、神話や宗教、心理学や文芸学など、様々な視点から述べられてきた。その起源や様式、地理的伝播について、また本書の扱う死と誕生のモチーフや宇宙観についても多くの書物が書かれている。著者が大学で学んだと思われるドイツ語圏の書だけを見て、ライエン、ヨレス、リューティといった名が浮かんでくる。それらの中に、本書をもまた並べられるだろうが、その際には、本書が研究書の域を超えて、著者の生き方をも導くこととなった、その点が何よりも特筆して評価されるべきであろう。

再刊は、実践と経験に裏打ちされている。共感の支えもまた働いたことであろう。ミンダナオで続けられる子ども図書館の働きへの信念、またことばや本のちからへの信頼が本書（再

刊）の真の主題である。その意味で、第三章に述べられる、昔話体験や想像することの力が、すなわちことばが現実や世界を見る眼を変えることができるという体験の叙述は、評者自身、久しくことばに携わる者として共感を持って読んだ。詩やお話しが、知的に構成された現実と匹敵、いな凌駕することができるか。世界を改変することができるか。もちろん、現実世界を動かす政治などに比べれば力は微少である。しかし、ことばもまた辛子種であり、福音と同じように世界の片隅に光を灯すもの。その光こそがいのちであって、人や世界の痛みを癒しうる。著者の世界観の中心にあるその思想には、評者も共感する。

現代の世界においては、自然と人間が分離しており、霊と「実存（現実的生の謂か）」もまた分裂している、という著者の問題意識は多くの人が共にする。それが、なぜ、どのように生じたのか、著者は日本人の（さらには人類の）存在論的な系譜として統一的に描き出す。その直感的な把握は見事だが、歴

史をたどったことのある人を納得させるにはあまりに素朴な独断と言わざるを得ない箇所もある。農耕牧畜文化への移行による自然の異界化に対応して、ブツダとキリストがともに人格神として登場したとか、西洋の科学技術文化の宇宙像を新プラトン主義やグノーシス、錬金術の神秘主義の系譜のみから説く仕方に、評者はついて行けない。しかし、考えの違いはあっても、ことばの働きに対する著者の信頼と実践に、評者は共感するがゆえに、信じる道をしつかりと歩んでいくてくださいたいと語りたい。その意味で幸いな読書体験を与えてくれる本であった。

（かわなこ・よしかつ＝東京大学教授、日本詩人クラブ理事長）
（四六判・二四六頁・定価一四七〇円〔税込・教文館〕）



新刊



日本における
聖書翻訳の歩み

上智大学
キリスト教文化研究所 編
●四六判並製 定価2,100円

福音書翻訳のむずかしさ
——個人的所感
佐藤 研

フランススコ会聖書研究所
訳注の合本刊行を終えて
——伝統的釈義と現代の釈義の相克
小高 毅

日本における聖書翻訳の歩み
渡部 信

ケセン語訳聖書から
セケン語訳聖書へ
山浦玄嗣

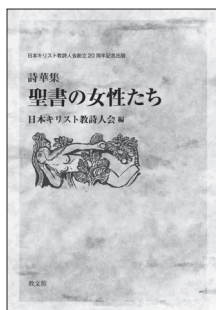
キリシタンは聖書について
何を学んでいたのか
——ペドロ・ゴメスの
『神学要綱』に見る聖書理論
佐久間 勤

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

詩人の心と目で読む聖書
日本キリスト教詩人会編

詩華集 聖書の女性たち



船本弘毅

聖書の中で最も古い文書は、ヘブライ民族の素朴な詩歌の断片であったと言われています。レメクの歌（創四・二三―二四）、モーセやミリアムの歌（出一五章）、デボラの歌（士五章）などが、その代表的なものであり、次いでダビデやソロモン時代の詩や詩集が、旧約聖書を形成して行ったと考えられています。神のことがばが、韻を踏んだものとして語られ、伝承され、イスラエルの民は詩や歌をもって応答し、自からの信仰や思いを表現したことは、注目に価することです。旧約聖書においても、新約聖書においても、詩歌・詩編・讃歌が大切な位置を占めていることは言うまでもありません。

我国にキリスト教詩人会が誕生したのは、一九九二年十二月四日でした。そして二〇一二年十二月、創立二十周年の記念講演会と祝会が開かれると共に、『二十年略史』が作成され、『詩華集 聖書の女性たち』が記念出版されました。日本キリスト教詩人会としては、すでに四冊の詩華集を出版しておられ、本書は第五冊目ですから、精力的に活動してこられたことに深い敬意を表したいと思います。最初の詩歌集『神の涙』は一九

九四年、次いで『イエスの生涯』が一九九六年、『創世記』が二〇〇〇年、『聖書の人々』が二〇〇六年に、いずれも教文館から出版されました。

二十周年を記念する今回の出版が、なぜ『聖書の女性たち』というテーマになったのかは明らかにされていませんが、本書には十九人の作者により、旧約と新約から、それぞれ十八篇の詩が収められています。同じ女性を取り上げたりしていますから、旧約聖書からは十四人、新約聖書からは十一人が登場し、全体の詳細な解説を影山恒男氏が執筆しておられます。取り上げられたのは、役割を果たして活躍した女性ばかりではなく、説教などには殆んど登場しない人も含まれています。

詩人の鋭い目と豊かな感受性を通して、二五人の聖書の女性たちがさまざまに表現され、聖書理解への新しい視点が与えられています。たとえば、冒頭に「エバ」が出て来ますが、「身も心も美しいエバ／なんの心配もないエデンの園で／このうえない夫と愛しい／仲良く 神への篤い信仰を深くしている」（喜春子）と歌われる一方で、「涼しい風の吹く頃に かそけく

やさしい足音がして／二人は隠れた 神が呼んでおられる……

「神の顔」が見られない そのみじめさ 恐ろしさ／人とは何者でしょう」（中山直子）という厳しい問いかけが歌われています。

旧約の女性としてよく引用される「ナオミ」についても、「わたしは何という倅せものか／嫁のルツが／ふるさとベツレヘムに帰るわたしに／どこまでもついてくるという／わたしはもう独りではない」（東延江）と歌う詩とともに、長編の詩の中で、事を冷静に計る女としての姿を画き出す詩（川田靖子）が出て来ます。

負の評価を受けて来たヘロディアに光を当て、「偽預言者よ、消えよ。わたしがこの手を血に染めてお前を殺したのではない。……わたしが娘をそのかしたという噂は、「風を追いつめる」ようにむなしこと。その真相は、怨嗟（えんさ）なのか嫉妬（あやまり）なのか遊びなのか、わたしにだって分かるはずはない。――すべての臆測

は後（おと）じされ。黄昏（たそがれ）はすでに西方から迫っている」（柴崎聰）と詰め寄ってくる詩もあります。

聖書は何を語るのか、聖書をどう読むのか、聖書の人たちはどう生きたのか、そして、わたしたちはどう生きるのか、といった根源的な問いの前に、わたしたちを立たせる力を本書は持っています。キリスト教詩という重い課題に挑戦する詩人たちの労苦が、この混迷の時代に信仰を持って生きようと苦闘している人々に、新しい希望と生命を指し示してくれることを願いつつ、本書が多くの方に読まれることを願って止みません。

（ふなもと・ひろき＝東京女子大学元学長）
（B6判・一四四頁・定価一七八五円（税込・教文館）



キリスト教書総目録 2014年版 創刊25周年記念特集号

内容

総記年鑑 辞（事）典 図説年表／全集（著作集） 叢書 講座／聖書／神学／宗教学 思想倫理／伝記（ライオン）／信仰入門書 人生論 説教集／文学小説 評論／エッセイ 詩 劇 音楽 美術 建築 教育保育 心理 社会福祉／児童 絵本／讃美歌 式文／DVD CD カセット ビデオ／キリスト教関連雑誌 新聞 書名索引／著者索引 掲載出版社名簿

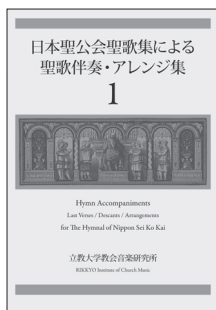
佐藤 優氏 橋爪 大三郎氏
若松 英輔氏

■ A5判 一般頒価1冊300円 送料240円
■ お近くの書店様でお求めください。

キリスト教書総目録刊行会
事務局 〒162-8710 東京都新宿区
東五軒町6-24 トーハンビル内
TEL.03-3266-9521

礼拝の実践の場から生まれた、聖歌伴奏集
立教大学教会音楽研究所・編

日本聖公会聖歌集による 聖歌伴奏・アレンジ集 1



宮崎 光

キリスト教の礼拝において、音楽を奏でること、とりわけ「歌うこと」は、その起源から必要不可欠な要素である。古代の教会ではユダヤ的な調べを受け継ぎ、打楽器、弦楽器、笛などの伴奏によって民族的伝統音楽が奏でられていたと考えられ、中世、特にローマ的な典礼様式の発展とともに、無伴奏による単旋律音楽が培われてきた。その変化は、「人の歌声」を「祈り」と一致させてゆくという、礼拝の本質への高純度の気づき、そして実践であったといえよう。続く宗教改革の時代には、専門家が担うようになっていた「祈りの歌」を、いかに民衆の手に取り戻すか、すなわち信徒が主体的に「歌うこと」ができるための取り組みがなされ、コラル、詩編歌、そして「ヒムン（聖歌／賛美歌）」が生み出された。それに伴って、「人の歌声」を支えるための伴奏楽器としてのオルガンも、その奏法も多様な発展を続けてきた。

ことに英国教会（聖公会）の礼拝で用いられる「聖歌／賛美歌」は、大聖堂聖歌隊が奏でていた多声音楽の味わいを継承した豊かな和声（ハーモニー）で彩られ、礼拝に集う人々（会衆）

が共に「歌うこと」を推奨して培われてきたものである。それゆえに、オルガニストは「人の歌声」を支え、「祈り」の心を促す重責を担い、会衆と心を合わせつつ、伴奏によって歌声を引き出すことも求められてきた。その実践から、「聖歌／賛美歌」の各節の音色をふさわしく変化させるだけでなく、最終節（last verse）などを即興的に奏楽する習慣も受け入れられてきた。英国各地の大聖堂聖歌隊の録音物（CDなど）を聞くと、最終節はそれまでの和声とは違ったオルガン伴奏によって、盛り上がりをもつて歌い終わるものに容易に出会える。

そのような伴奏譜は、オルガニスト自身が編曲するのが望ましいが、気の利いたものが出来るとは限らない。そのニーズにに応じて「ラストヴァース集 last verses」なる楽譜集が、英国では数多く出版されている。「聖歌／賛美歌」の曲譜には、世界共通の Tune name（曲名）があるので、「ラストヴァース集」は、日本でも「聖歌／賛美歌」を歌う教会ならば有用である。けれども、日本語詞の内容と編曲譜の趣向とが適応しない場合もしばしばあり、さらには日本で新たに創作された「聖歌

／賛美歌」については、もちろん既存の編曲譜は無い。日本の創作賛美歌を積極的に収録した『日本聖公会 聖歌集』（二〇〇六年刊行）のためにも、全曲の編曲譜を用意する企画が「立教大学教会音楽研究所」によって立ち上げられ、その第一集が出版された。

『日本聖公会聖歌集による聖歌伴奏・アレンジ集1』という書名の通り、これは「ラストヴァース集」だけではない。『聖歌集』の伴奏譜を弾きやすくしたものや、またピアノ譜をオルガン用に編曲したもの、デスカント（旋律より高音域で装飾的に展開するパート）が付いた譜もある。同研究所所長で立教大学院教会音楽ディレクターのスコット・シヨウ氏が、「編曲にあたっては、日本語の歌詞が持つ情感や弾きやすさを大切にするとともに、何より会衆が歌いやすい伴奏を求めている立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊の学生たちと一緒に歌いながら推敲をかさね」と記しているように（三頁）、本書は同礼拝堂で行われる礼拝の実践から芽吹き、開花したものに他ならない。その編曲は、立教学院オルガニストの崎山裕子氏と立教池袋中学校・高等学校オルガニストの原田靖子氏が担っている。崎山氏は言う「年に四〇〇回以上の礼拝を捧げる立教学院では、同じ聖歌を繰り返し用いることも多く、それぞれの場面で生き生きと賛美するために、伴奏に様々な工夫を重ねることが不可欠」（五頁）

と。特に、聖歌／賛美歌を歌うことも、パイプオルガンの音色を聴くことも、多くの学生・生徒・児童にとっては入学して初めて経験することのため、いかにして「人の歌声」を引き出し、「生き生きとした賛美」、そして「祈り」の心へと向かわせられるかが、教会音楽担当者たちの正念場でもある。その意味でも本書の伴奏譜は、これまでの日本の教会音楽ではあまり耳馴染みのない、現代的な和声進行も随所に見られる。辛口批評をすれば、「ひねり過ぎ」、「スパイス効かせ過ぎ」な感じもあるが、一筋縄ではないか若い人たちを振り向かせてきた手応えのよいものが、ここに表れているようにも思う。従って各教会で用いる際には、「オルガニストは、元の聖歌を良く練習し歌詞を味わってから」、「事前に会衆と一緒に歌ってみるなど、くれぐれも無理のないように」（五頁）との助言もぜひ心しておきたいものである。

本書は、『聖歌集』の「朝の礼拝」「昼の祈り」「夕の礼拝」「就寝前の祈り」「主日」という項目に配された聖歌から三六編（全四〇曲）が収録された。巻末の「諸教派賛美歌集対照表」は、広く使用されることを視野に入れた配慮。「降臨節」「降誕節」の聖歌アレンジ譜が収録される第二集の出版が待望される。

（みやざき・ひかり＝立教大学チャプレン）
（A4判・五六頁・定価一八九〇円〔税込〕・日本キリスト教団出版局）

■教文館

イエス・キリスト時代のユダヤ民族史Ⅲ

E・シューラー著

小河 陽、安達かおり、馬場幸栄訳

当時の歴史史料を原典に即して引用しながら、イエス時代の文化・政治・宗教について詳細に解説する。他では知ることの出来ない情報を満載した資料集。

A5判・418頁・9450円

神の国上

——キリスト教古典叢書

アウグスティヌス著／金子晴勇ほか訳

アウグスティヌスの代表作であり、西欧の国家論・歴史哲学の形成に寄与した記念碑的大著の全訳。上巻では異教徒に対する弁証論を中心に、「地の国」の歴史を論じる。

A5判・800頁・6510円

■キリスト新聞社

聖書入門

アンゼラム・グリューン著

中道基夫、萩原佳奈子訳

『50の天使』、『魂にふれる50の天使』と『クリスマスの黙想』の著者であるアンゼラム・グリューンが贈る初心者向け聖書入門書。50のキーワードから旧・新約聖書66巻の魅力が味わえる！

四六判・214頁・定価2100円

INFORMATION

近刊情報

■日本キリスト教団出版局

並木浩一著作集2 批評としての旧約学

並木浩一著

聖書が生まれた視座に向けて「想像力」を馳せ、旧約の本質と全体をつかみ取ろうとする、並木浩一の旧約学研究。第2巻では並木のこの方法論を「批評」と把握して、自身の学的歩みを顧みる。

A5判・350頁・4200円

歌いつつ聖徒らと共に

——キリスト者の死と教会の葬儀

トーマス・G・ロング著／吉村和雄訳

変わりつつあるキリスト教会の葬儀を源流からたどりつつ、キリスト者はどのように死を理解して備えたらよいのか、また葬儀の執行や葬儀説教とは何かを具体的に論述する。

A5判・330頁・4725円

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www.7oon.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-136 敷板センター171F	022-223-2736	共用		fcqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新神戸駅前22 茅菜クリスタルセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taindo/	tainshindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisutoyoushoten@nara@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yodanetcs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	0810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@inbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacs	ochibook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9、18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9933			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一 万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川2-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emacbs@yahoo.co.jp	

新教出版社

福音と世界

2014年1月号

特集 今、神学するとは――

芦名定道

神学の可能性を問う………

今、神学を深めるには？……… 阿部仲麻呂

キリスト教研究としての神学……… 土井健司

神学の危機と「沈黙の中間派」……… 深井智朗

新連載

岩田雅一「断想」

・大城実「自分史」

・寺園喜基「KDを読む」

・洛雲海「韓国教会通信」

編集室から

先日、JR中央線の内車で不思議な一団を見かけた。二十代後半から三十代と思われる青年たちであったが、男性は全員、紺のスーツに単色のネクタイ、髪型は昨今、絶滅種に近い横分け。女性は、淡いピンク色のスーツ姿で、はじめ制服なのかと思っただけ、よく見ると細部が違う。自前の衣裳であることがわかる。皆、一様に明るく、清潔感に溢れていた。それに同じ車両にしながら、男性は男性だけ、女性は女性だけで集まり、お互いに話さないのも珍しかった。企業の研修会かとも思ったが、どうも雰囲気が違う。そのうち、宗教団体の青年会かも知れないと気づいた。案の定、ある宗教団体の本部近くの駅で、全員張り切って降りていった。

推測に過ぎないのだが、昔のクリスチャンというのは、世間から不思議な一団と見られていたのではないか。クリスチャンといえは敬虔、潔癖、真面目、勤勉というのが（事実とは別として）定説ではなかったのかと思う。「敬虔なクリスチャン一家」

折られた花

日本軍「慰安婦」とされた

オランダ人女性たちの声

M・ハーマー著／村岡崇光訳

第二次世界大戦中、日本軍により「従軍慰安婦」とされ、人生に深い傷を負ったオランダ人女性たち。すべての日本人に聴いてほしい、折られた花々の声。



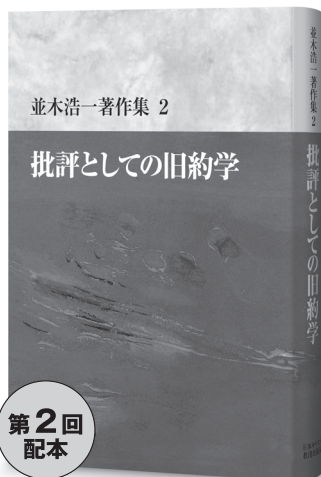
◎ 四六判・216頁・1900円＋税

という表現はマスコミの常套句であり、それはそれでありがたい遺産である。因みに辞書を引くと「メソジスト」の項には、「(まれ) 形式主義者」、「(まれ) 堅苦しい人」と書かれている(『ランダムハウス英和大辞典 第二版』)。これはメソジストを皮肉った表現であり、当然、教会は抗議すべき事柄である。しかし、広い意味で昔のクリスチャンが、世間にそう言わせるほどの確固たる人物像を持っていたのも事実であろう。

私も旧メソジスト系の教会で育った。メソジスト色は希薄にはなっていたが、一九七〇年代まで、礼拝に出席する熟年女性の多くは着物に羽織姿であった。それが普段の礼拝であった。居ずまいを正し、会堂の前列に肅然と居並ぶその姿は、青年たちには無言の諭しを与えた。

昔は良かったなどとは言わない。単に和服の方が着慣れていただけなのかも知れない。しかし、心は形に表れる。形式と形式主義は別物である。良き形は引き継ぐべきだと思う。(寺田)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL: 03-3260-6148
FAX: 03-3260-6198



第2回
配本

並木浩一 著作集 2 全3巻 批評としての旧約学

聖書を生み出した人々の生活と思想に向け
「想像力」を馳せ、旧約テキストの本質と
全体を掴もうとする著者の方法論「批評」
の成果とは。 ◆A5判 上製・350頁・4,200円

シリーズ
刊行案内

第1巻

ヨブ記の全体像

▶好評発売中 4,200円

第3巻

旧約聖書の水脈

▶2014年5月刊行予定

講演会

著作集刊行を記念して、連続講演会開催！
3回にわたり、著者自身が全3巻を解説

第1回 「ヨブ記の全体像」

日 時 2014年1月11日(土) 13時30分～15時30分
会 場 教文館9階 ウェンライトホール
参加費 500円

申込み 教文館キリスト教書部へFAX、Eメールのいずれかでお申込下さい。
TEL 03-3561-8448 FAX 03-3563-1288 E-Mail xbooks@kyobunkwan.co.jp

●主催／教文館キリスト教書部、日本キリスト教団出版局 ●後援／日本キリスト教文化協会

講演会開催予定 ▶第2回 2014年3月15日(土) ▶第3回 2014年6月7日(土)



歌いつつ聖徒らと共に キリスト者の死と教会の葬儀

トーマス G. ロング 吉村和雄 訳

米国有数の説教学者が、現代のキリスト教葬儀を問う。
その源流から辿り、死への理解や備え、葬儀の執行な
どを具体的に論述。 ◆A5判 上製・330頁・4,725円



覆刻・日本基督一致教会信仰ノ箇条

「覆刻・日本基督一致教会信仰ノ箇条」出版委員会編



日本基督一致教会で「信仰ノ箇条」として採択されたドルトレヒト信仰規準、ウエストミンスター信仰告白、同小教理問答、ハイデルベルク信仰問答の現存する最古の翻訳覆刻する。

●18,900円

ユダヤ教の福音書

ユダヤ教の枠内の
キリストの物語

ダニエル・ボヤーリン 土岐健治訳

●2,100円



「父なる神と子なる神」受難する救い主」……。これらは本当にキリスト教独自の考えだろうか？ 聖書と古代のラビ文献を丹念に読み直し、従来の見方を覆す意欲作！

キリスト教神学の主要著作

オリゲネスからモルトマンまで

R・A・クライン、C・ポール他編

佐々木勝彦、濱崎雅孝他訳



水平から垂直へ

船本弘毅

今を生きるわたしたちと聖書

問題が山積する現代に生きるわたしたちに、聖書は何を語りかけているのか——垂直を目指す地上での水平の旅路を支える、「生命と希望」のメッセージ。

●1,995円

救いの歴史と信仰の倫理

大宮 溥

ローマ書講解説教下

ユダヤ人に福音を拒絶された使徒パウロは、同胞の救いについてどう考えていたのか？ 神の民をめぐる救いの歴史を説き明かし、神に应えて生きる指針となる説教集。

●1,680円

オリゲネス、アウグスティヌスからルター、カルヴァン、そしてバルトやボンヘッファーに至るまで、18人の神学者の古典的名著を厳選し、著者の評伝や執筆事情、そして本の魅力と核心を伝える。神学的思索の面白さと読書の喜びを伝えるブックガイドの決定版。

●4,200円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は「e-shop 教文館」へ！ <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop教文館

12月の新刊のご案内

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇一四年一月一日発行（毎月二回一日発行）
本のひろば 第六七号 二〇一四年一月号

発行所 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三三六〇六五〇 振替〇〇一七〇一五 一六六七
発行人 本村利春 編集人 中川 忠 印刷所(株)平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三―三六〇一五六七〇

定価七五円（税抜七二円）（〒60円）
一年分一三〇〇円（送料共）